

関帝廟（かんていびょう） 中山手通7丁目



神戸に住む華僑の人たちの信仰を集めているのがこの関帝廟という寺院である。現在、寺としてはどの宗派にも属していない。朱塗りの門を入ると、本堂の屋根には青色の二頭の竜が向い合い、空中で跳ねているように見え、中国らしさを感じさせる建物となっている。なお、関帝とは『三国志演義』で蜀（しょく）の劉備（りゅうび）を助け活躍する関羽（かんう）とである。

この寺は1892（明治25）年、神戸の華僑呉錦堂（ごきんどう）らによって、長楽寺（今の大阪府東大阪市布施にあった、黄檗山万福寺の末寺）をこの地に移し中国人の寺としたのがはじまりである。1939（昭和14）年に関帝と天后像をこの寺に祀ったが、1945（昭和20）年の空襲で長楽寺もろとも焼失してしまった。1947（昭和22）年に焼失した長楽寺のあとに、中国人の有志が関帝廟を造営し、その後拡張を重ね、現在のような姿になったのである。なお、本堂前の銅製の大きな線香立て（大香炉）には、清朝時代の「光緒一八年」（1892年）の銘がある。また、旧暦7月13日から16日までの盂蘭盆会（うらぼんえ）には豪華な飾りがなされ、太鼓やカネなどを打ち鳴らしてにぎわう。

場所：神戸市中央区中山手通 7-3-2



本堂前